

みんなのひろば

万葉歌人とスギ

〈いにしへの人の植ふけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし〉。万葉集(巻10・1814)に収められている柿本人麻呂の歌である。当時は、まだ花粉という言葉も概念もなかったのだから、この際、霞ではなく花粉だったのではないかと疑いのまなざしを向けるのはやめておこう。

万葉の歌人が昔を振り返り、先祖の時代から営々と行われてきたスギの植林事業を称賛していたことは、現代に生きるわれわれにとつて驚くべきことではないだろうか。おそらく、藤原京や平城京の建設に大量の木材が使われたため、人々は危機感を抱きつつ、スギの植林を始めたのであろう。

林竜馬氏らによる「琵琶湖湖底堆積物に記録された過去100年間のスギ花粉年間堆積量の変化」(2012年、『日本花粉学会誌』)という論文に掲載されている過去14万年間におけるスギ花粉堆積量の変化を参照すると、特にスギ花粉が多かったのは、最終間氷期後半に当たる11万5千年前頃と2千3千年前頃で、いずれも日本でスギ花粉症が国民病と称されるようになる1980年代のスギ花粉堆積量に匹敵していたことが分かる。屋久島の縄文杉は、後者の時代における数少ない生き残りといつて良い。

その後、古墳時代から古代に移るにつれ、鉄器の普及や王権の成立、律令制施行により、スギをは

人麻呂も称賛した植林

東京農業大国際食料情報学部教授 小塩海平 (東京都東久留米市)

じめとする針葉樹が大量に消費されるようになった。山地や平地に分布していたスギの天然林は都市や水田の開発のために伐採され、人麻呂の時代に至ったのである。日中戦争や太平洋戦争の頃、大量の木材が軍需物資として供出され、国土の多くがはげ山と化した。さらに戦後、空襲などによって焼失した木造住宅を再建するため、木材需要は飛躍的に高まった。政府が国家的プロジェクトとして、熱心にスギの植林事業を推進したのはこうした事情による。当時の人たちは将来、海外から安いラワン材が輸入されるようになり、パソコンが普及してペーパーレスの時代が到来し、さらに少子高齢化の波が林業従事者にも波及して、多くのスギが切られないまま、花粉を大量に放出するようになるという状況は、想像すらつかなかったに違いない。

群馬県には旧石器時代や古墳時代、そして縄文時代に至るまで、数多くの遺跡が存在する。住人たちが私たちのように花粉症を患っていたとは思われないが、少なくとも、同じようにスギ花粉を浴びていたことは確かである。

そういえば、人麻呂には「上野伊奈良の沼」に関する歌があり、板倉町の板倉沼や館林市の多々良沼ではないかと推察されている。冒頭の歌に詠まれたのは、群馬のスギ花粉だったかもしれない。

スギ花粉症の季節、人麻呂のように、しばし、スギを植えてくれた人々の苦悩に思いをはせてみてはどうだろうか。

【略歴】専門は植物生理学。著書に「花粉症と人類」、共著に「農学と戦争 知られざる満洲報国農場」など。東京農業大で博士後期課程修了。静岡県出身。

視点

